

長松日扇（1817－90）は、幕末期の安政4年（1857）、京都に「華洛本門佛立講」（現、本門佛立宗）を開き、在家者を主体とする新たな活動をはじめている。

その日扇が活躍した幕末期から、明治中期における日蓮宗教学史の特徴のひとつに、在家講の樹立と在家教学の勃興を挙げることができる。ことに幕末期における日蓮教団は、江戸幕府の御用宗教として形骸化し、僧侶は伝統を墨守するのみで、本来の宗教的役割を失いつつあった。この状況に飽き足らない在家の信者たちは、寺院や僧侶を仲介せず、直接日蓮の教えに直参し、布教の第一線に立ち活動を展開していることが知られる。ここに在家者を主体とする講中が各地に開かれ、また在家者による教学も樹立されるに至ったのである。この新たな動きは、教団寺院に多大の脅威を与え、両者による教学上の論争も盛んになされた。日扇の「華洛本門佛立講」も、次第に勢力を伸ばし、僧侶らと盛んに教学論争を行っている。

このように、全国的に展開した在家講は大いに隆盛したのではあるが、明治期に入ると一転して衰微の一途を辿っている。それは、講中が廃仏毀釈に端を発するあらゆる弾圧に耐えられなかったことや、講の後継者問題が存していたようである。その結果、在家講の多くは消滅、あるいは教団寺院に吸収されている。一方、日扇の「華洛本門佛立講」は、八品門流（現、法華宗本門流・本門法華宗）傘下の在家講でありながらも、政府による弾圧、門流による教学的論争や組織的対立に屈しつつ発展を遂げている。

ところで、日扇に見る日蓮宗教学史上の特異性は何か、と問いを設けてみると、思想的・実践的の面において日扇の独自性が見られる。

まず思想的な面においては、日扇が属する八品門流では、成仏論をめぐる問題（成仏は十界皆成であるか、あるいは人間界に限るのか）「皆久論争」（三途成不論争）が顕在化していた。日扇は、成仏は人界に限る立場を取り、十界皆成に立つ門流と対峙し持論を展開している。

つぎに実践的な面においては、二点挙げられる。第一に、日扇は日常の信行における法要儀礼において、『法華経』の読誦は謗法であるとして、題目口唱を第一義としていることである。題目口唱は、日蓮教団共通の信行的実践方法ではあるが、法華経の読誦を否定している点は、他に例を見ないのである。第二に、日扇は信徒に対し釈教歌を詠じての教化活動が見られることである。釈教歌を詠じることは、日本仏教史上行われてきたものであるが、日扇は三千首以上にわたる釈教歌を詠じることにより、その教導を行っているのである。釈教歌を通じての教化活動は、教学史上における特性の一つといえよう。

そこで、本発表においては、日扇の思想的・実践的課題として特性がみられる、皆久論争と、法華経の読誦謗法と、釈教歌による教化活動に視点をあてて考察してみたい。

キーワード 皆久論争 読誦謗法 釈教歌